



#109 Annette Messenger et Romy Schneider

フランスを代表する女性アーティスト、アネット・メサジェの展覧会情報。また、フランス語トピックは、往年の名女優ロミー・シュナイダーを取り上げます。レッスンはこのトピックからおおくりします。

☆パーソナリティ

ボブ & ちえ

☆今週のゲスト

渡邊 茂一さん
森美術館広報部

Générique et intro

Le 27 septembre 2008, numéro cent et neuf de chocolat, magazine bilingue français – japonais.

Très intéressante exposition d'Annette Messenger au Musée Mori à Roppongi.

Une grande actrice française, née en Autriche, Romy Schneider.

「アネット・メサジェ：聖と俗の使者たち」

いつもワクワクする展覧会を提供してくださる森美術館。今回もお勧めの内容です。

Annette Messenger est une femme artiste. Influencée par les événements de mai 68, elle devient artiste dans les années 70. A cette époque, l'art est un univers encore très masculin, et Annette y trouve sa place, non pas en faisant la même chose que les hommes, mais en créant son propre style.

覚えよう petit à petit♪

le premier ministre

首相

russe

ロシアの

sinon

さもないと

se flinguer

(銃などで)自殺する

en son honneur

彼女に敬意を表して

interpréter

皇后、后妃

Autriche

オーストリア

tourner

(映画に)出演する

4e

= quatrième

série

シリーズ(「シシー」三部作をさす)

rapporter

もたらす

producteur

プロデューサー

débutant

デビューしたての、新進の

une pointe d'accent allemand

すこしドイツ語なまりを交えて

pari

賭け

insensé

常軌を逸した、とてつもない

pièce

戯曲

putain

娼婦

encombré de...

...で一杯の、...であふれた

empaler

串刺しにする

grille

鉄柵、格子

lien

リンク、関連

tournage

(映画の)撮影

rêver de...

...のことを夢に見る

verser

注ぐ、流し込む

vilain

醜い、下劣な、たちの悪い

foutre à la porte

(戸口で)たたきだす、追い出す

Boulevard Saint-Germain

(パリの)サン・ジェルマン大通り

Romy Schneider...

Bob : Chié-san! Sais-tu qui est l'actrice préférée du Premier ministre russe, l'ancien Président Poutine ?**Bob** : Mais, est-ce que tu sais aussi que Monica Bellucci a dit qu'aucune comparaison n'est possible avec Romy Schneider, elle a aussi ajouté : "Sinon tu te flingues". C'est aussi en son honneur que Sophie Coppola a appelé sa fille Romy.**Bob** : Et toi, Chié, qu'est-ce que tu connais d'elle? Est-ce qu'elle est connue au Japon?**Bob** : En 1955, Romy a 18 ans et elle interprète l'impératrice d'Autriche dans « Sissi ». C'est un énorme succès, mais Romy Schneider refuse de tourner le 4e film de la série.

Écoutons-la en parler.

Romy Schneider : Je... J'en avais marre, je savais que c'est bien gentil, c'est charmant, c'est... Mais pas plus que ça. Et ça me rapporte peut-être beaucoup d'argent, au producteur et à moi aussi, mais c'est pas ce que je veux, c'est pas... Et là je me suis arrêtée. Je savais... ça va pas comme ça.**Bob** : En 1958, elle vient à Paris pour tourner « Christine ». C'est la star du film et on lui demande de choisir son partenaire en lui montrant des photos. Elle choisit la photo d'un acteur débutant, Alain Delon. Elle a 20 ans et lui 23, ils deviendront un des couples les plus célèbres du cinéma.**Bob** : Romy parle français avec une pointe d'accent allemand. Quand a-t-elle appris le français, ça, je ne sais pas. Mais, Visconti, le metteur en scène italien lui propose un pari insensé: jouer au théâtre en français et avec Alain Delon. Le titre de la pièce: «Dommage qu'elle soit une putain».**Bob** : Sa vie privée est encombrée de malheurs énormes. Son ex-mari, le père de son fils David, se suicide en 1979, elle a 41 ans. Deux ans plus tard, David, son fils âgé de 14 ans meurt empalé sur une grille. Un an plus tard, on retrouvera Romy Schneider morte chez elle.**Bob** : Il y a un lien vers un extrait du film sur le site de chocolat. C'est un film que j'aime beaucoup. C'est un film d'Andrzej Zulawski, «L'important c'est d'aimer». Romy Schneider interprète une comédienne ratée qui n'arrive pas à dire "je t'aime" sur un tournage. Romy Schneider recevra pour ce film le César de la meilleure actrice. Voici un extrait sonore.**Jacques** : J'ai rêvé de toi. Tu me versais du Coca Cola dans l'oreille. Une vilaine mort, croyez-moi.**Nadine** : Il faut qu'on travaille, il faut qu'on travaille.**Servais** : Et bien, travaillez, les enfants, travaillez.**Nadine** : Vous avez toutes les photos que vous vouliez?**Servais** : Si je vous demande qu'on se revoie un jour, vous me foutrez à la porte tout de suite ?**Nadine** : Aussitôt. Quand ?**Servais** : Boulevard Saint-Germain à quatre heures, ça va ?**Nadine** : Ici à trois heures. Ça va ?

petite leçon: ぶんぼう一口メモ

1) フランス語の基本

動詞《connaître》— 直接法現在、現在分詞、過去分詞

- **qu'est-ce que tu connais d'elle, est-ce qu'elle est connue au Japon?** (彼女[ロミー・シュナイダー]について君はどんなことを知っているの? 日本では彼女は有名なの?)

よく使う不規則動詞《connaître》の活用(直説法現在)を声に出して発音し、暗記しましょう。

発音練習: (直説法現在) **je connais / tu connais / il connaît / nous connaissons / vous connaissez / ils connaissent**

例文) - **Je ne connais pas cette actrice.** (私はこの女優を知りません。)

- 現在分詞: **connaissant**

日本人には一人称複数**connaissons**と似たように聞こえることがありますので、発音するときにしっかり区別しましょう。

- 過去分詞: **connu**

過去分詞はしばしば形容詞になることがあります。ここでは「知られた、有名な」という意味です。

例文) - **Elle est mondialement connue.** (彼女は世界的に有名だ。)[形容詞]

発音練習: (直説法複合過去とその否定形) **j'ai connu; je n'ai pas connu**

例文) - **Elle l'a connu à Paris.** (彼女は彼とパリで知り合った。)[複合過去]

2) フランス語のコツ

2-1) 《aucun》(どんな～も)の使い方

不定形容詞《aucun/aucune》は、通常は、単数名詞の前に置き、動詞は《ne》のみで否定します(つまり**pas**は省きます)。[なお、複数形で使うケースや、《ne》を省くケースなどもありますが、今回はとりあげません。辞書などでご確認ください。]

- **aucune comparaison avec Romy Schneider n'est possible...** (ロミー・シュナイダーと比較するなんて何であれ不可能です。)

例) - **Aucune difficulté ne l'arrête.** (どんな困難も彼はものとしません。)

- **Nous n'avons aucun souci.** (私たちには何の心配もありません。)

2-2) 《[pas] plus que +名詞》(～以上である[以上ではない])

c'est charmant ... Mais pas plus que ça. (魅力的ですけど、でもそれ以上ではありません。)

《**Pas plus que ça**》は、「それ以上ではない」「ただそれだけのことさ」という意味です。一方、《**plus que ...**》だけの場合は、逆に、「～以上の」「～を超えた」ということです。

例) - **Il veut être plus que son père.** (彼は、父親を超えた人間になりたいと思っている。)

3) テキスト中の固有名詞の解説: ロミー・シュナイダーとその周辺

テキストには、ロミー・シュナイダーをめぐる人名や映画タイトルなどがたくさん登場します。映画好きな方はご存知でしょうが、そうでない方のために、簡単な解説をつけましょう。

- **Romy Schneider:** ロミー・シュナイダー(1938～1982年)

オーストリア出身の名女優。両親ともに俳優の家庭に生まれ、15歳でデビューし、43歳で謎めいた死をとげるまでのあいだに60本以上の映画に出演した。

- Monica Bellucci : モニカ・ベルッチ(1964年生れ)

イタリア人で、モデル出身の美人女優。「イタリアの宝石」と呼ばれる。映画『アンダー・サスペクション』(2000年)で、かつてのロミー・シュナイダー(ミレール監督『仮拘束』**Garde à vue**、1981年)と同じ役を演じた。

- Sophie(Sofia) Coppola : ソフィア・ Coppola(1971年生れ)

アメリカの映画監督・脚本家・女優・写真家・ファッションデザイナー。ロミー・シュナイダーを敬愛し、自分の娘を「ロミー」と名づけた。「美と才能の象徴である彼女の神秘性が私は大好きです」と述べている。

- «Sissi» : エルンスト・マリシュカ監督、ロミー・シュナイダー主演の映画『プリンセス・シシー』(1955)、『シシー: 若き皇妃』(1956)、『シシー: 皇妃の運命の歳月』(1957)の《シシー》三部作。

第一作から大ヒットしたこの映画で、まだ17歳だったロミーは、戦後ドイツのアイドル・スターにのし上がる。だが、ロミー自身は、おとぎ話のような少女趣味のこの物語の主人公と自分が同一視されることに苦しんだ。「私の名はロミー・シュナイダーです。シシーではありません! **Moi, je m'appelle Romy Schneider et non Sissi!**」。「もう私はうんざりでした **J'en avais marre**」。そして、シリーズ第四作への出演を拒否した。かつてのオーストリア皇妃エリザベート(愛称シシー)が、堅苦しい牢獄のような宮廷生活を嫌い、自由を求めて、夫である皇帝フランツ・ヨーゼフのもとを去ったのと同じように、ロミーもまたドイツを逃げ出し、「1958年にパリにやってきて、映画『クリスティーヌ』に出演する」**En 1958, elle vient à Paris pour tourner «Christine»**ことになる。

- «Christine» : ピエール・ガスパール=ユイ監督作品:邦題『恋ひとすじに』(1958年)

この映画でロミーは、やがて恋人となるアラン・ドロンと出会う。相手役を選ぶにあたって俳優の写真を見せられて、ロミーはまだ無名の「新人アラン・ドロンを選んだ **Elle choisit la photo d'un acteur débutant, Alain Delon**」。二人の関係は五年ほど続いた。

- Alain Delon: アラン・ドロン(1935年生れ)。映画俳優で、演劇にも出演

映画**«Christine»**で出会った翌年に、アラン・ドロンは、ロミーとの婚約を発表。世紀の美男美女のカップルとして世間の話題をさらった。映画『太陽がいっぱい』**Plein soleil** (ルネ・クレマン監督、1960年)で彼は主役を演じ、世界的な映画スターの名声を手にする。だが、彼の浮気などでロミーとの関係は悪化し、1964年に破局。しかし、映画**《La Piscine》** (1969年) [邦題『太陽が知っている』]で、ドロンは相手役にロミーを選び、ロミーは妖艶な魅力を披露した。だが、二人の仲が戻ることはなかった。

後にロミーはこう述べている。「ドロンは女としての私の生き方のなかで大切な人でした **Delon a beaucoup compté dans ma vie de femme.**。彼は私を救いだし、私のなかの女性に気づかせてくれたのです **Il m'a sauvée et m'a fait découvrir la femme qui était en moi.**」。とはいえ、「生き方についての考え方は私とは正反対でした。彼は仕事で成功することに夢中だったのです」。

- «Dommage qu'elle soit une putain» (『あわれ彼女は娼婦』) 舞台作品

ジョン・フォード原作の戯曲をルキノ・ヴィスコンティが脚色し、1961年にパリ劇場で上演。アラン・ドロンとロミー・シュナイダーが共演。

ロミーがヴィスコンティの作品に初めて出演したのは、映画ではなく演劇だった。愛するドロンとの共演とはいえ、母国語でないフランス語を使って舞台上で語るのは彼女にとって試練だった。練習中にヴィスコンティに叱りつけられたロミーは、「私は俳優の家に生まれたのだから」と奮起し耐え抜いた。公演が始まってまもなく、腹膜炎で倒れたロミーは、手術を受け、20日間舞台に穴をあける。だが、舞台再開の初日には、女優イングリッド・バーグマン、作家ジャン・コクトー、シャンソン歌手エディット・ピアフなど錚々たる顔ぶれが観客席を占めていた。

- Luchino Visconti : ルキノ・ヴィスコンティ(1906-76)。イタリアの映画監督、舞台演出家、脚本家

ヴィスコンティは、続いて映画『ボッカチオ'70』(1961年)にロミーを起用した。「ヴィスコンティは私の偉大な先生 **grand professeur** です」、とロミーは述べている。

11年後に『ルートヴィヒ』(1972年)制作にあたり、ヴィスコンティは、ロミーに皇妃エリザベート役をまた演じるよう依頼し、リベンジの機会を与えた。ロミーは、少女趣味の「シシー伝説」から解き放たれて、歴史にあるがままの皇妃を、「自由で自立し、夫から無視されながら永遠に旅を続ける女性 **femme libre, indépendante et délaissée par son mari, éternelle voyageuse...**」を高らかに演じきった。エリザベートのなかに己を見出すことで、ロミーは己自身を取り戻したのである。

晩年のヴィスコンティもまた、長い間構想を練ってきたこの映画で己の影を探索していた。同性愛に苛まれ、理想の美の探究に執心する孤独な狂王ルートヴィヒ二世のなかに、自分と同じ没落貴族の退廃的耽美主義、その悲哀と倒錯的心性を見出そうとしたからである。

- **Andrzej Zulawski** : アンジェイ・ズラウスキー(1940年生れ)、ポーランドの映画監督

- « **L'important c'est d'aimer** » : 『重要なのは愛すること』(1974)。ズラウスキー監督作品。

この映画でロミーは、「成功できなかった女優 **une actrice ratée**」という未踏の役柄を演じてみせた。生活のためポルノ映画にさえ出る主人公に「完全に感情移入して **en empathie totale**」、与えられた役を極限まで追求した。「あえて自分を醜く見せ **n'hésite pas à s'enlaidir**」、熱に浮かされ、不安に苛まれ、混乱し、「自己破壊 **autodestruction**」に至る、自分とは逆の状況を生きる女を見事に表現したのである。

- **le César** : セザール賞: フランス映画向けの賞で、1975年に設立。

こうしてロミーは、設立されたばかりのセザール協会から、「最優秀女優賞 **la meilleure actrice**」を受賞。この頃から彼女の演技は円熟期に入る。

- 息子 **David** とロミーの死:

1981年に、息子 **David** が親戚の家の鉄柵をよじ登り、大腿部の動脈を切って死亡する。以前からヘビースモーカーだったロミーは、この悲劇に打ちひしがれて、うつ状態となりアルコールに溺れてゆく。にもかかわらず、遺作となった『サン・スーシの女』**La Passante du Sans-Souci**(ジャック・ルーフィオ監督、1981年)では、奇しくも息子を慈しむ母親役を感動的に演じる余力を残していた。この映画が公開されてまもなく、自宅のアパートマンで人知れず死を迎えたロミーが発見される。検死はなされず、心臓発作か睡眠薬か死因は特定されないまま、遺体は愛する息子の墓の隣に埋葬された。華々しい成功に彩られた大女優の人生行路が、女であり母でありたいと望みながら果たせなかった **ratée** ひとりの女の悲痛な叫びを押し殺したのだろうか。